



❶ えさし藤原の郷の定期公演で礼庭を披露する石関獅子躍。市内の金津流では唯一、前幕に仙台藩主伊達家由来の「竹に雀紋」が染められている。太鼓胴部に巻かれたシラベ隠しの色は赤墨

❷ 国道456号沿いに建つ石関獅子躍供養碑（江刺稲瀬字向田地内）。左側の碑は、平成23年に第14代相伝四門之儀を執り行った際に建てられたもの

❸ 公演前に撮影した踊り手の集合写真。岩谷堂高校鹿踊部の卒業生の加入などもあり、平均年齢は20代後半となっている。女性や県外から通う踊り手もいる

奥州遺産

— ときを越え

受け継がれるもの —

第141回

金津流石関獅子躍

（市指定無形民俗文化財）

江刺稲瀬石関地区

さまざまな流派に派生しながら、宮城や岩手で受け継がれてきた鹿踊り。江刺稲瀬の石関地区に伝わる金津流石関獅子躍は、県内の金津流獅子躍の宗家として、現在の隆盛の礎を築いてきた。

その歴史は江戸時代後期の安永8（1779）年までさかのぼる。宮城郡國分松森村（現仙台市）から伝承されて以来、地域で大切に踊り継がれながら、他地区へも広がりを見せていった。しかし、昭和初期になると、戦争などの影響で中断を余儀なくされる。平成に入り復活の機運が高まると、地区の若者を集めて伝承活動を再開。分家筋の野手崎獅子躍から指導を仰ぎ、平成14年に約半世紀ぶりの復活を果たした。以降は地域での公演のほか、愛知万博や全国青年大会にも出演するなど精力的に活動を展開している。

石関地区全戸が保存会の会員となって支えている石関獅子躍。太鼓の音を二度と絶やさぬよう、ばちを握るその手にはみんなの思いが込められている。

広告